

行幸記念誌

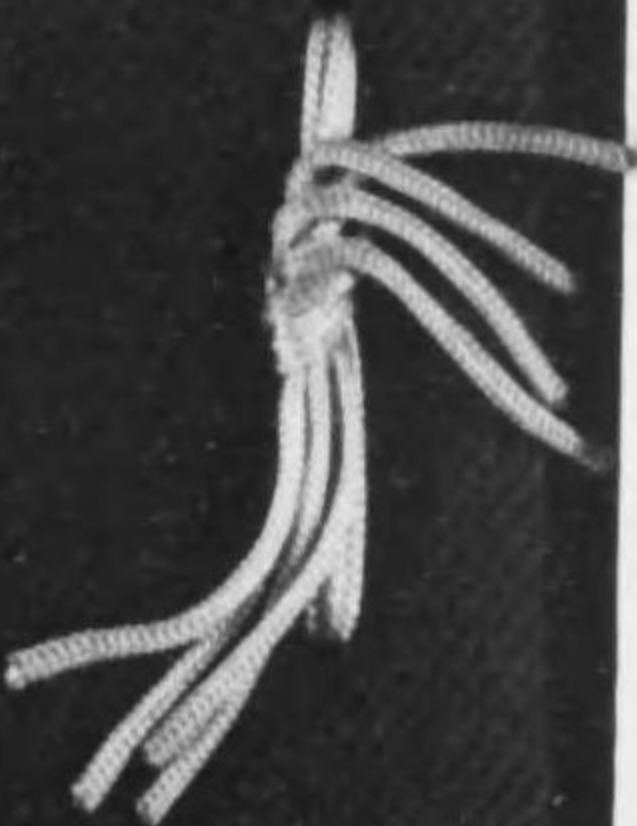
304-139



1200501368706

304

39



始





行幸記念誌

根室町役場



序

伏して惟るに

聖上陛下本道の山野に陸軍特別大演習御統裁の御砌、昭和十一年九月二十八日北陸根室に 聖駕を枉げさせ給ひて、具さに民情を嚮はせられ、衆庶を撫育し、徳化を邊土に布き給へるは、寔に優渥なる 御聖慮に出でさせ給ふところにして、 御仁慈の無邊なる實に拜祭し奉るだに畏き極みにして、千載の下猶萬民の感泣措かざるところたり。蒼生乃ち 聖旨を奉戴し赤心を捧げ奉り、以て愈々 忠誠奉公の志を鞏くし 天恩の萬一に報い奉るの覺悟なかるべからず。

茲に謹みて 行幸記念誌を編し後昆に傳へむとする所以なり。

昭和十三年三月

根室町長 松 尾 豊 次

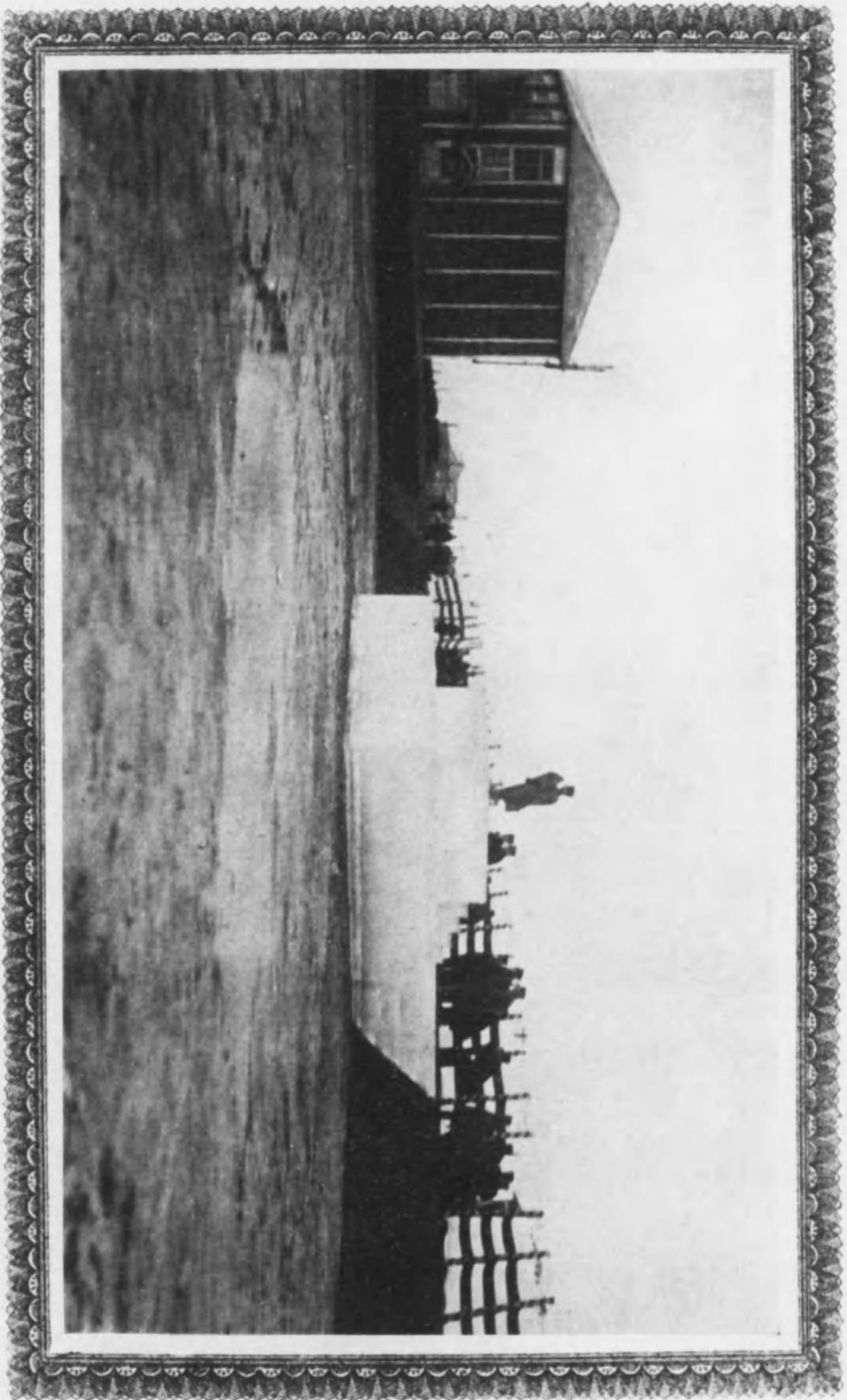
目次

御 日 程	一
鳳 輦 奉 迎 送	九
侍 從 御 差 遣	二〇
賜 調	二四
天 機 奉 伺	二七
天 覽 陳 列 品	二七
天 覽 漁 船 並 漁 具	二八
體 驗 奏 上	二九
賜 饌	三六
御 紋 菓 拜 受	三八
天 覽 成 績 品	四四
御 下 賜 金 品 拜 受	四七
謹 話	五六



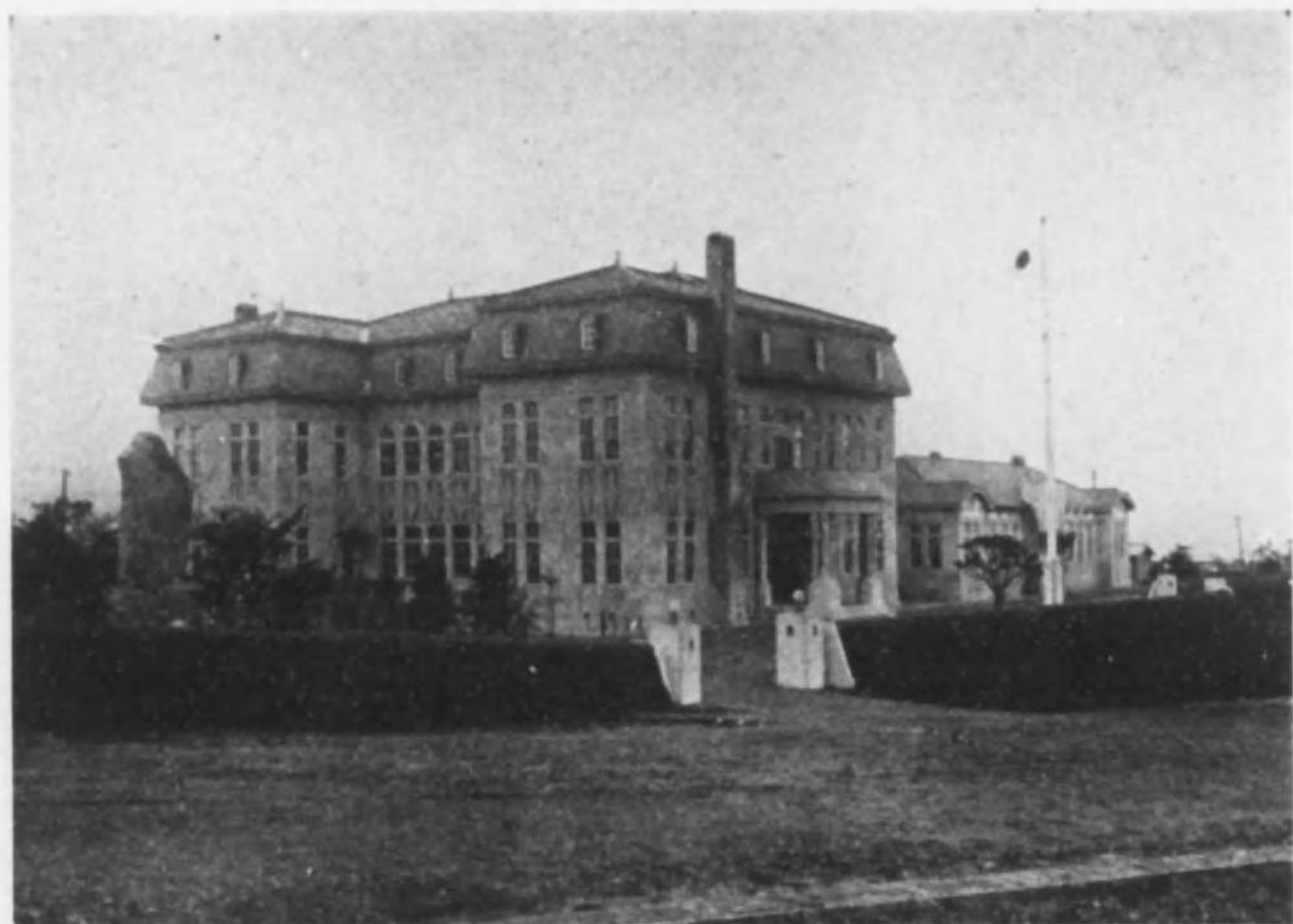
筆下閣雄恒平松 臣大内宮

道民來迎場

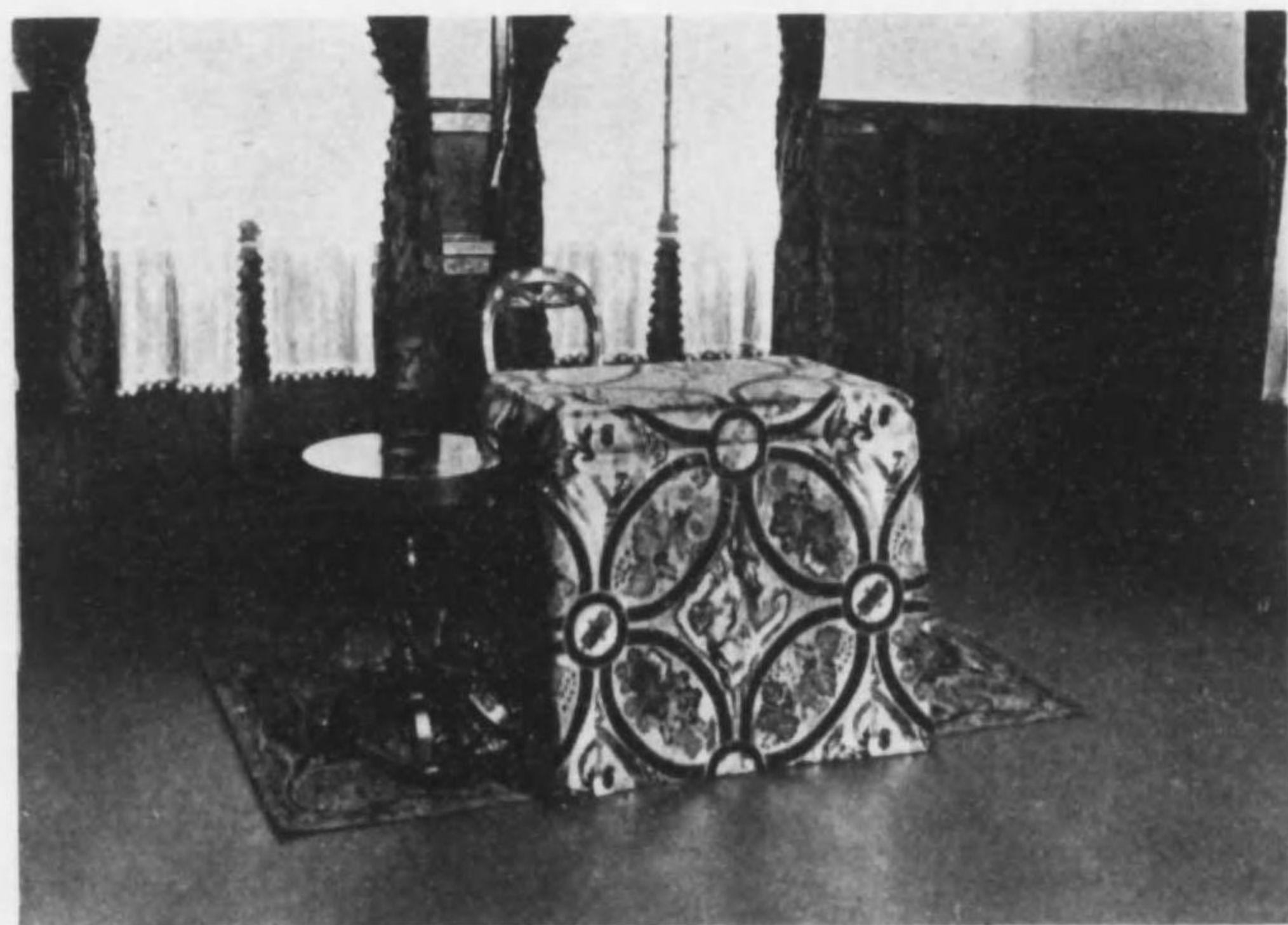


所 望 展 仰





堂會公室根 所憩休御



所 座 御

者 榮 光 上 奏



氏 郎 二 政 原 福 長 廳 支 室 根



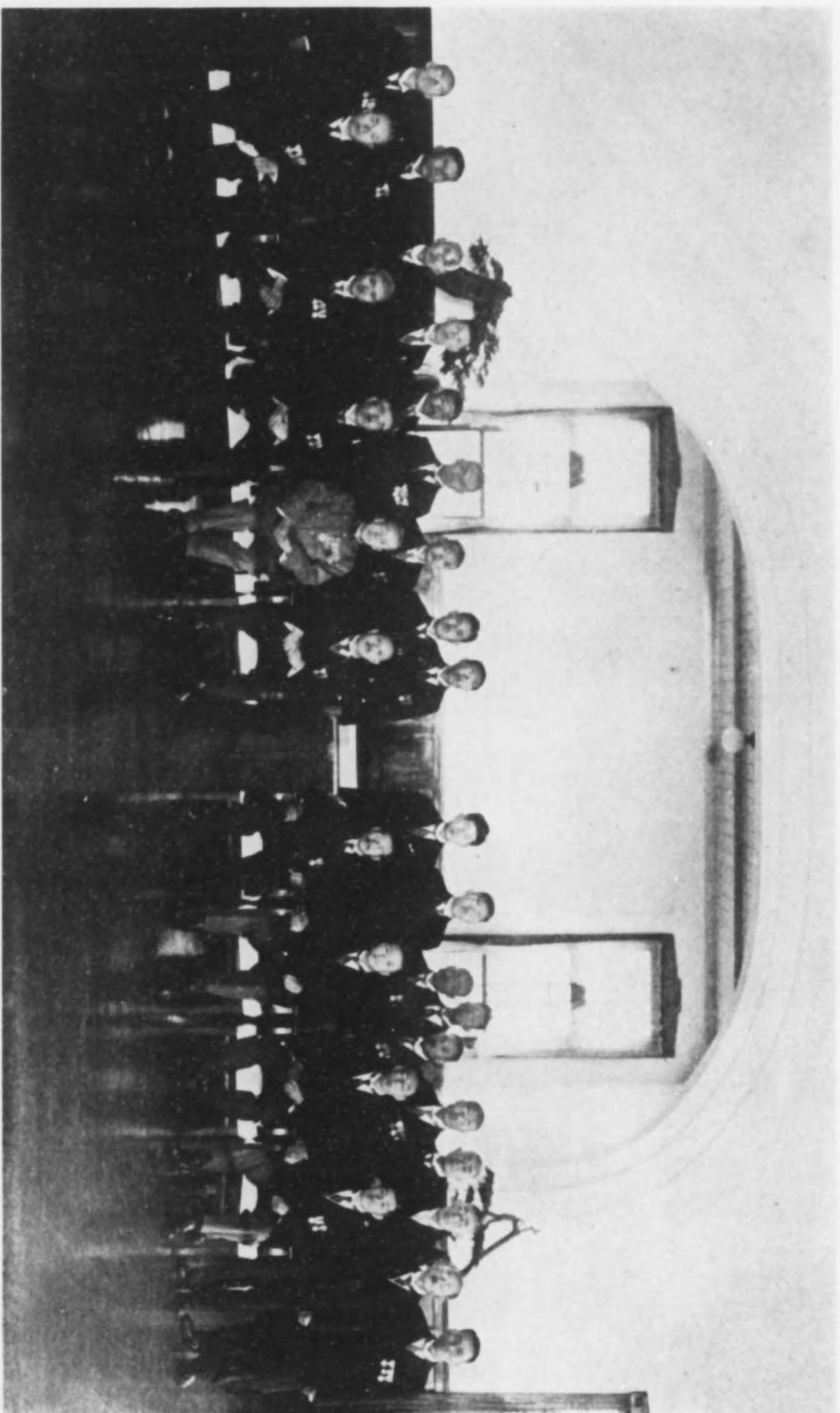
下 關 清 田 池 官 長 廳 道 海 北



氏 來 將 山 橫



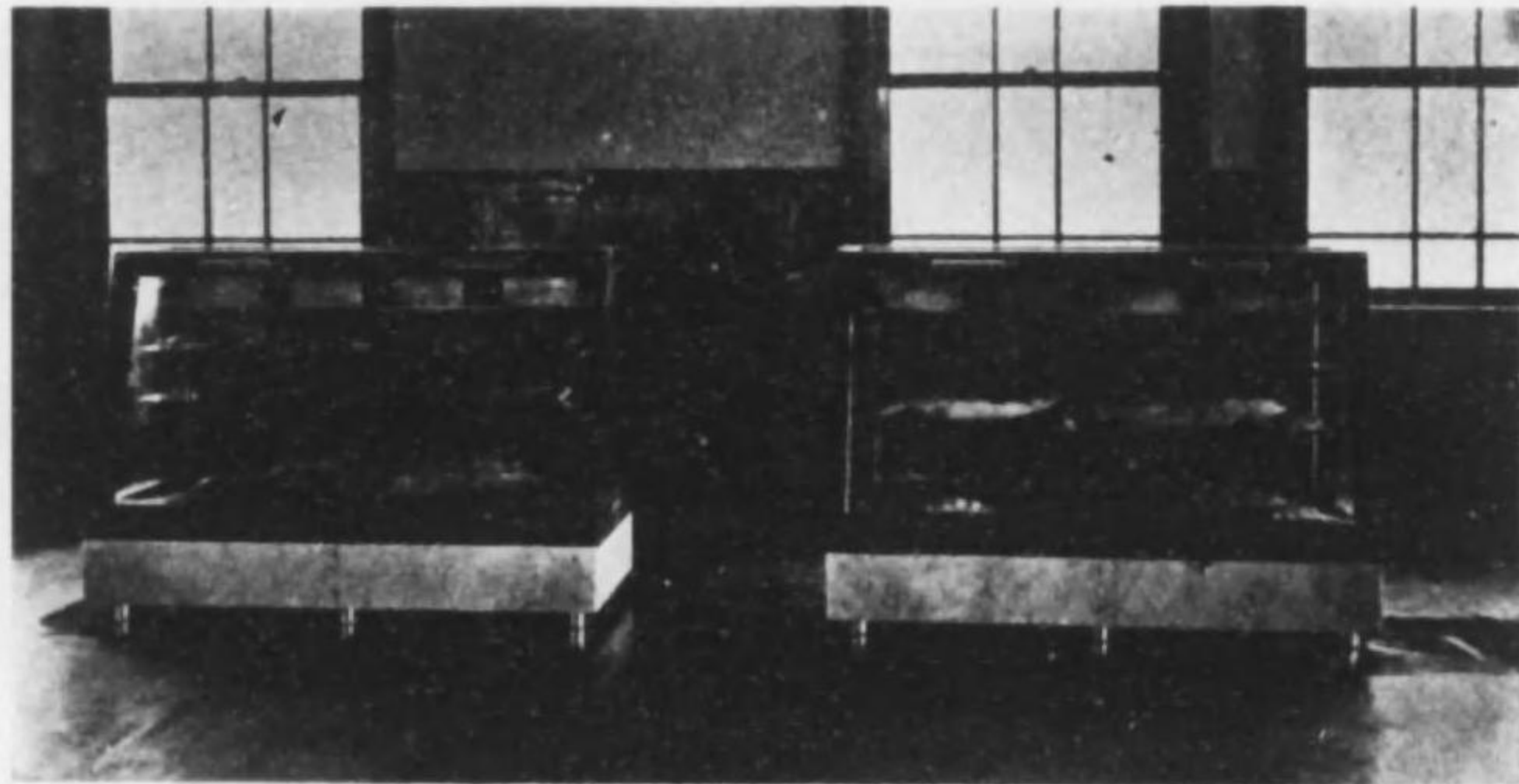
氏 次 豐 尾 松 長 町 室 根



者榮光賜賜立列



奉 迎 塔



天 覽 冷 凍 魚 介

體 驗 奏 上 光 榮 者



島 田 二 氏



藤 井 太 吉 氏

賜 饌 光 榮 者 (根室町) イロハ順



大矢純義氏



大島義孝氏



大和田誠壽氏



石橋榮之助氏



稻垣龍氏



高橋正男氏



吉田榮吉氏



兼古萬吉氏



大鹽礼氏



磯永勝三郎氏



中山一郎氏



中島義一氏



坪谷俊治氏



竹原太郎氏



松尾豊次氏



山下鐵藏氏



八木安太郎氏



延原重男氏



佐野忠三郎氏



小林德吉氏



藤井太吉氏



福田清氏



福原政二郎氏



員委迎奉町室根

御 日 程

昭和十一年九月八日を以て

天皇陛下陸軍特別大演習御統裁竝地方御巡幸の爲、昭和十一年九月二十四日御發轍、北海道へ行幸あらせらるべき旨

仰出さる。

御日程左の如し。(抜萃)

九月二十四日

午前八時

同 八時十分

同 九時二十分

逸見埠頭より御乗艇

軍艦「比叡」に御乗艦

午前十時三十分

御航海

御發轍

東京驛御發車

横須賀驛御著車

横須賀軍港御出港

九月二十五日

御航海

九月二十六日

午前七時十分

室蘭港御入港

室蘭水上棧橋より御上陸

株式会社日本製鋼所室蘭工場へ行幸

午前九時三十分

室蘭驛御發車

午後二時十九分

旭川驛御著車

御親閲場、第七師團司令部、北海道旭川師範學校へ行幸

行在所

旭川偕行社

九月二十七日

午前八時

行在所御出門

同 八時十八分

旭川驛御發車

午後四時二十八分

釧路驛御著車

道民奉迎場へ行幸

行在所

釧路市男子高等小學校

九月二十八日

午前八時二十分

行在所御出門

御展望所へ行幸

午前八時四十七分

釧路驛御發車

午後零時十分

根室驛御著車

根室公會堂、御展望所、道民奉迎場へ行幸

午後一時五分

根室驛御發車

同 四時二十六分

釧路驛御著車

行在所 釧路市男子高等小學校

九月二十九日

午前八時

行在所御出門

同 八時十四分

釧路驛御發車

同 十一時三十分

帶廣驛御著車

北海道製糖株式會社帶廣工場、北海道廳立十勝農業學校、御親閲場へ行幸

行在所

帶廣市明星尋常小學校

九月三十日

午前十時二十分

行在所御出門

同 十時三十分

帶廣驛御發車

午後零時十六分

大樹驛御著車

北海道拓殖實習場十勝實習場、大樹村拓北部落へ行幸

午後二時四十分

大樹驛御發車

同 四時二十一分

帶廣驛御著車

行在所

帶廣市明星尋常小學校

十月一日

午前八時五十分

行在所御出門

同 九時

帶廣驛御發車

午後四時十三分

札幌驛御著車

大本營

北海道帝國大學農學部

十月二日

大演習御統裁

十月三日

同

十月四日

同

十月五日

同

十月六日

觀兵式

賜 饌

午後二時

行在所御出門

北海道廳種畜場へ行幸

行在所

北海道帝國大學農學部

十月七日

午前八時三十分

行在所御出門

官幣大社札幌神社、札幌控訴院、北海道廳へ行幸

午前十時三十二分 札幌驛御發車

同 十時五十七分 野幌驛御著車

北海道林業試驗場へ行幸

午後二時四十八分 野幌驛御發車

同 三時十三分 札幌驛御著車

北海道帝國大學農學部

行在所

十月八日

午前九時 行在所御出門

同 九時五分 札幌驛御發車

同 九時十三分 琴似驛御著車

北海道工業試驗場、北海道農事試驗場へ行幸

午前十一時十二分 琴似驛御發車

同 十一時二十分 札幌驛御著車

御親閱場、北海道帝國大學へ行幸

行在所

北海道帝國大學農學部

十月九日

午前九時三十分 行在所御出門

同 九時三十七分 札幌驛御發車

同 十時二十分 小樽驛御著車

小樽公會堂、小樽高等商業學校、北海製罐倉庫株式會社へ行幸

小樽棧橋より御乘艇

軍艦「比叡」に御乗艦

午後二時三十分 小樽港御出港

御航海

十月十日

午前八時三十五分 函館港御入港

函館稅關棧橋御上陸

北海道水產試驗場函館支場、國幣中社函館八幡宮、津輕要塞司令部、函館市青柳尋常小學校、御親閱場

へ行幸

函館税関棧橋より御乗艇

軍艦「比叡」に御乗艦

午後四時

函館港御出港

御航海

十月十一日

御航海

十月十二日

午前九時三十分

横須賀軍港御入港

逸見埠頭より御上陸

同 十時五十分

横須賀驛御發車

正午

東京驛御著車

還幸

鳳輦奉迎送

天皇陛下には、九月二十八日午前八時四十七分宮廷列車を以て釧路驛御進發、一路根室に向はせらる。

輿過ぎ給ふ所、天地亦感あり、夜來の秋雨彌、滋くして無心の山川草木も齋戒沐浴千載一遇の光榮に對へ奉るかの如し。

天皇陛下には、雨中奉拜の民草に雨具を差許させ給ひ、御仁慈の洩れ傳はる所感激更に新、沿線無數の奉迎者は各驛構内外に整列し御召列車を一途に迎へ奉る。

根室驛ホームより御道筋一帯は、沛雨に潤ひて清々しく掃き清められ、奉迎塔の尖頭にはためく日章旗にも一入莊嚴の氣色漂ひ、御道筋は紅白卷綱の彩り鮮かにして、御警衛の憲兵警官の配置も些の遺漏なく整ひ、特別有資格者一同はプラットホームに堵列し、著御を御待ちし奉る。御著車二分前に打揚げられし煙火の雲空に轟き、鳳輦今や此地に入らせ給ふを報ずる中に、御召列車は軌の音も軽く滑るが如く午後零時十分安らかに驛頭に著御あらせらる。

此の時港内百有餘艘の汽船、發動機船は一齊に汽笛を吹鳴し、光榮の音も高く著御を報じ奉る。

天皇陛下には、御長途の御旅程にも拘らせられず些の御疲れの御氣色だに拜せず、龍顔いとも御麗しく陸軍御軍裝に大勳位略綬を佩はせ給ひ、鈴木侍從長以下扈從の諸員を隨へさせられ、御英姿颯爽として玉歩を印せられ、畏く

も奉迎者に御會釋を賜はり、福田根室驛長の御先行、山下札幌鐵道局長の御先導にて步廊を通御、御料車に召させられ、略式函簿を以て榮光映ゆる奉迎塔を御通過、元屯田兵外御道筋特別奉迎有資格者を始め沿道官民の感激溢るゝ奉迎を受けさせられ、御道筋を右へ午後零時十二分根室公會堂に著御、松尾根室町長の御先導にて御座所に入御あらせらる。夫より侍従の御先導にて拜謁場の玉座に進ませられ、押川東太外二十七名に列立拜謁を賜はりたる後、御座所に於て池田北海道廳長官根室拓殖の狀況に關し謹みて左の如く奏上せり。

謹みて根室國の拓殖狀況を奏上致します。

根室國は北海道本島の最東端に位し、其の面積は二百三十三方里御座います。

當地方は海流の影響と海霧の襲來に依りまして、春夏秋冬に於ける氣溫の差が比較的少う御座います。

此の地方の開発は古く元祿年間に端を發し、明治二年十月根室に開拓使出張所が設置せられましてから、漁業者漸次増加し根室水産業の基礎が築かれたので御座います。明治十九年には内地府縣より屯田兵四百四十戸を和田村に移住せしめ北方の警備と農耕に従事せしめました外、原野方面に對しましては明治四十二年來移民を招徠し其の開発に努めて居ります。

行政区劃は一町五ヶ村となつて居りまして、戸數凡そ一萬六千六百、人口は約六萬人御座います。

教育に於きましては小學校六十八校、其の児童數が約一萬五百人御座います。外に商業學校一校、高等女學校一校

と、四十八の青年學校が御座います。

産業は水産業を以て主と致して居りまして、昆布、鮭、鱒、鱈、蟹等其の生産額は約八百七十萬圓に達して居ります。農業に在りましては現在耕地面積凡そ三萬町歩に達し、米作は不適當でありますので之を行ふ者なく、有畜農業を本體とし、主として燕麥、甜菜、馬鈴薯等を栽培して其の産額約百二十六萬圓を算し、其の他林産、畜産等を合せまして年生産額約一千百萬圓に達して居ります。尙當地方拓殖の將來と致しましては、農耕適地凡そ十二、三萬町歩を有して居る狀況で御座いますから、今後の開發に俟つべきものが極めて多い次第で御座います。

交通は最近海陸共に相當發達して參りまして、殊に原野殖民地方面に於きましては殖民軌道、官設驛選所の設置等に依りまして多大の利便を得て居るので御座います。

以上根室國の拓殖狀況に就いて申上げた次第で御座います。

次で北千島合同漁業株式會社取締役横山將來謹みて千島の狀況に關し左の如く奏上せり。

謹みて千島の狀況に就て其の概要を奏上致します。

千島は通常三分致しまして南千島、中部千島、北千島と申して居ります。

南千島は古くから開拓されました所でありまして、其の産業は畜産、林産、鑛産等も御座いますが大部分は水産業

で御座います。其の主なる水産物は鮭、鱒、帆立貝、トラバ蟹、昆布等で、凡そ一千萬圓の年産額が御座います。中部千島は獵虎、臘腸獸の保護の爲に獵業も漁業も禁止せられて居りますので、農林省に於て狐の飼養を致して居ります外は何等の産業も御座いませぬ。

北千島は明治二十六年郡司海軍大尉の主宰致しました報效義會員が、渡島致しまして活躍したのが同地方漁業開發の創りで御座いますが、漁業者が増加致しましたのは鱒漁業が勃興致しました明治四十年頃からのことで御座います。

次いでトラバ蟹漁業が興り、更に又昭和八年頃から鮭鱒流網漁業が盛んになりましたので、益々産業上の重要地位を占むるに至つたのであります。

鮭鱒流網漁業は昭和五年北海道水産試験場が調査に著手し、同七年に新漁場を發見致しまして其の有望なることが闡明されましたので遽かに盛んになつたもので御座います。一方鮭鱒建網漁業も亦之に伴つて勃興致しまして、從來から經營致して居りました鱒漁業並にトラバ蟹漁業を合せまして今日では之等水産物の年産額は一千五百萬圓に達する狀況に相成りました。其の他の産業では見るべきものは御座いませぬ。

千島の交通は函館港又は根室港を基點とする命令航路の外、民間の自由航路もありまして只今では相當便利になつて居ります。

通信施設は大體普及致しまして、主要なる漁業地には無線電信局も御座います。

一般に千島は甚だしき寒地であるかのやうに考へられて居りますが、南千島は根室地方と大差無く、又中部千島に於きましても北千島に於きましても今日迄の觀測によりますと、冬季旭川地方よりも暖かいと申されて居ります。

以上が千島に於ける大體の狀況で御座いますが、將來尙有望なる漁業が少くありませんので、多大の期待が懸けられて居る次第で御座います。

今回無上の光榮に浴し洵に恐懼感激の至りに堪へませぬ。益々千島水産業開發の爲に微力を竭しまして、聖恩に報い奉らむことを期する次第で御座います。

右奏上終るや

天皇陛下には、池田長官の御先導にて天覽品陳列室に成らせられ、冷凍魚介類、根室千島兩國鳥瞰模型、根室町鳥瞰圖を御巡覽あらせられ、池田長官謹みて御説明申上ぐるに、長くも玉歩を止めさせられ、御感興いと深かりし様拜せられたり。

御巡覽の後、池田長官の御先導にて列立拜謁者一同玄關に於て奉送申上ぐる中を發御、鹵簿は御展望所に御進發あらせらる、時に午後零時三十七分。

冷風清雨猶歇まずと雖も奉迎者は夫々指定位置に整列し、蜿蜒として御道筋の兩側を埋め其の數一萬餘、只感激の中に御通過を御待ちし奉れば、程なく御召車は近衛將校の側車護衛し奉り肅々と通御、扈從供奉員の宮内自動車其の

後に續き、轎車の音、雨潦に濡れて靜かに大地を傳はり行くや、奉迎者は面たりに龍駕を拜し奉り只唯至幸の感涙に咽ぶ。其の敬虔至誠の狀と歡喜感激の態とは、翠蓋搖々行き給ふ所、老幼となく男女となく葵心傾陽、一如心魂に徹し以て奉迎の忠忱を表し奉る。

御通筋、海岸町海岸に於て漁船十隻を天覽、斯くて午後零時四十四分縣社金刀比羅神社第一鳥居前に著御あらせらる。

港内百有餘艘の汽船發動機船、橋頭高く感激の滿船飾を以て奉迎の祝意を表し奉れば、海上の波浪も爲に勢を鎮め、強風に立騒ぎし神社境内の樹木すら一瞬鳴りを潛め、森嚴の氣天地に充ち滿ち、霧雨に變りたる雲間には時折陽射しさへ感ぜられ、風伯雨師舉げて御稜威に歡喜するものゝ如し。

神社境内御道筋には特別奉拜を差許されたる高齢者、何れも兒孫に扶けられ近親に擁せられて筵上に座し、老眼に感激の涙を湛へ、恐惶として拜し奉れば、

天皇陛下には、松尾根室町長の御先導にて御徒歩を以て參道に進ませられ、畏くも御會釋を賜はり御仁慈を垂れ給ふ忝さに、高齢者一同今は只感極まり情迫りて流涕嗚咽、其の聲眞に肺腑に發するものあり。

此の頃雨少しく歇むと雖も冷氣猶嚴しく、玉體に障らせ給はらんをも御厭ひあらせられず參道を通御、第一御展望所に著御あらせられ、御展望臺に立たせ給ひて畏くも根室港を覽はせ給ふに、松尾町長謹みて左の如く奏上す。

謹みて奏上致します。

當根室港が開港場として指定されましたのは明治四十三年で御座います。

此の向ふに御座います島が辨天島で御座います、島の上の建物は辨天燈臺で、此の燈臺は明治五年開拓使廳時代の建設に係るもので御座います。其の左の方に御座います神社は村社市杵島神社で御座います。

港の防波堤内部の被覆面積は六十三萬二千七百二十七平方米御座います。港内の一番深い處は七米乃至八米位で御座います、三千噸級の船が三隻位繫留出來ます。

根室町は三十町五字より構成致して居りまして、總戸數三、八二二、人口二〇、三一八で御座います。此處から見えます根室町市街は其の約三分の一位で御座います。

當根室町は大正十年八月根室線鐵道の開通を見たので御座いますが、停車場の位置が港灣と隔絶致して居ります爲めに海陸の連絡が甚だ不便の狀況に置かれておりました、爲めに臨港鐵道敷設の議が起り、昭和八年五月愈、建設する事に決定されまして工費十五萬五千圓を計上され、同月より工事に著手し昭和九年七月に竣功を見たので御座います。臨港鐵道の開通に依りまして愈、海陸連絡が至便となり、物資の集散極めて圓滑となりまして、將來北方開發に伴ひ異數の發展を見るものと豫想致して居る次第で御座います。

當根室港の築港計畫は第一期と第二期とに區別して計畫樹立されて居ります。第一期計畫は大正九年度より豫算百〇六萬七千圓で著手され、第二期計畫は昭和二年度より豫算百三十一萬九千圓で工事を進められて居るので御座いま

す。此の先に見えますのが北防波堤で目下工事中で御座いますが、此の築堤延長は二百四十一米になつて居ります。其の向ふの辨天島より出て居りますものが西防波堤でありまして、此の延長が百五十一米で御座います。西防波堤と北防波堤との中間が根室港口になるので御座いまして、其の港口は百四十米の計畫になつて居ります。

根室港は目下築設中の北防波堤方面より襲來致します波浪が高い爲めに、殊に小形碇泊船は碇泊上の不便が多いので御座います。故に船入測築設の議が起りまして、是等の不便を除去致しますと共に海陸連絡の設備を完成致します爲めに、根室町は町營工事として、港内東部に船入測一萬二千〇三十二平方米、之を圍繞する埋立四萬〇三百八十二平方米の築設工事を、昭和六年に起工致し同七年七月に工事の完成を見たので御座いまして、爾來海陸連絡上極めて至便となりました次第で御座います。尙此の船入測内には常に二十噸級の發動機船が五十隻内外繋留利用されて居りますので、益、其の利用價値の向上を見つゝある状況で御座います。

根室港の船舶の出入の一番多い季節は九月十日頃で御座いまして、此の季節には支那行昆布の積取船が多く参ります。

次で福原根室支廳長の奏上せる所左の如し。

謹みて奏上致します。

本日は雨天で御座いまして、彼方の御展望所に行幸を仰ぎ奉ることが出来ませぬが、晴天で御座いますと彼方の御展望所で（國後島を圖示し）此の國後島が指呼の内にあるので御座います。（國後泊山を圖示し）此の泊山の如きは最も近う御座いまして、麓に泊村と言ふ戸數約百戸の漁村が御座いますが、根室とは僅かに四十六軒を隔て、居るのみで、發動機船を以て致しましても三時間程で達することが出来るので御座います。（前面の海上を指し）此の港外は根室灣と申しまして、（國後島の方角を指し）向ひは國後島、左側は此の（圖面を指し）根室國で、（北方を指し）此方が北に當りますが、根室海峡を通じオホーツク海に至りまして、（東方を指し）東は瑤瑤瑠水道を経て太平洋に連つて居ります。此の海上一帶は蟹、鮭、鱒、帆立貝、昆布、鱒等の漁田として古くより知られて居ります。此の附近は毎年一月下旬頃より四月中旬の間に於きまして海上一帶に、主としてオホーツク海方面よりの流水が去來致し、此の爲に航海船舶が非常に難澁を來すので御座います。

流水の最も激しい時に在りましては此の根室港内は勿論のこと、遠く國後島、知床半島に至るまで海上一面に流水に蔽はれまして、一月より三月に至る間全く航海が杜絶致しますことも珍らしく無い様な次第で御座います。

従ひまして當地と千島方面との通信交通の關係は、春より秋の間に於きましては大體順調で御座いますが、冬季間は之が極めて不便で御座いまして、僅かに此の背面に御座います花咲港を基點と致しまして、國後島の古釜布並に擇捉島の年萌の兩不凍港に依り聯絡を保つて居る様な次第で御座います。

此の方角に當り（圖示し）此の知床半島が突出致して居りまして、（圖示し）晴天で御座いますと此のラウシ岳、

ウナベツヌブリ等が能く見ゆるので御座います。

尙此の方向に當り（圖示し）此の斜里岳、標津岳、西別岳等の高山が御座いまして、山麓より東南に展開して居ります原野は主畜農業者を移住せしめつゝある根室殖民地で御座います。根室と北見の國境は是等の連峯に依つて爲されて居るので御座いますが、何れも相當に高う御座います關係上、兩國の氣候に非常な差異がある次第で御座います。

當地方は毎年五月頃より八月に至る間、海霧の多いことが氣象上の一つの特色と爲つて居るので御座います。其の最も甚だしい時期は六月、七月、八月の三ヶ月の間で御座いまして、根室測候所の調査に依りますれば此の期間に於きまして天日を仰ぐ日は僅かに數日に過ぎませず、多少濃度の差は御座いますが殆ど濃霧を以て蔽はれて居る様な状況で御座います。此の海霧の發生は廣く本道の襟裳岬より北千島方面に涉り、夫れが濃度の關係で多少の差異は御座いますが、當地方では大體沿岸より十五軒乃至二十軒の内陸に及びまして、奥地に行くに従ひまして漸次消滅致しますが、其の爲めに當地方は夏季の氣候が低冷で御座いまして、農耕に非常な影響を來たして居る様な次第で御座います。

北見地方に於きましては（圖示し）是等の連峯が斯様な海霧に依る氣象上の影響を遮断致して居りますので、夏季の氣温も高く、樹木の生育其の他農耕の上にも著しい恩恵を與へて居る次第で御座います。同地方が當根室地方に比較致しまして歴史が新しいにも拘はらず其の内陸の開発が進捗して居るのも、一つには此の點に基因致して居るものと思はるゝので御座います。

雲海未だに開かず、千島諸島の御展望を仰ぎ奉る能はず、第二御展望所行幸は御中止あらせらる。

天皇陛下には松尾町長の御先導にて高齢者の奉送裡に、御車寄より御召車に乗御遊ばされ、午後零時五十八分發御、御道筋を一路道民奉迎場に向はせらる。

これより先、道民奉迎場たる北斗尋常高等小學校グラウンドには根室町民を始め附近各村、遠くは千島諸島より、千載一遇の光榮に浴せんと引率者に従ひて聚ひたる奉迎者の數四千。愈、御展望所發御の報傳はるや、何れも肅然として靜謐水を打ちたるが如く、恭敬の念に溢れつゝ只管著御を御待ちし奉る。

夜來の雨に清淨せられたるグラウンドは清砂を敷きて濕氣を拂ひ、憲兵警官の警戒の中に、玉座は眞新しき白布に包まれて崇巖に鎮り、路面に張り繞らされたる幔幕の風にはためくも一入神氣を覚え、折しも雨雲の千切れし中に陽光射し出づれば、國旗掲揚柱の大日章旗翻騰として天日の光輝に莊嚴たり。

御南薄道民奉迎場御間近に至るや「氣ヲ付ケ」の喇叭嘯唳と奏せられ、奉迎場内の緊張其の極に達し、四千に餘る赤子只感激の中に御待ちし奉れば、御召車は午後一時五分著御あらせらる。

天皇陛下には、水野北海道廳社會課長の御先導にて玉座に進ませられ、畏くも奉迎者を嚮はせ給へば、今ぞ仰ぎ奉る至尊の御英姿、只感極まりて身肉戦き、心魂顫へ、拜さんとして猶頭の下るのみ。高橋北斗尋常高等小學校長の號令一下、奉迎者恭しく最敬禮をなし奉れば、

天皇陛下には、畏くも御擧手の御會釋を賜はり、次で池田北海道廳長官道民奉迎の辭を奏上し、萬歳を首唱し奉る

に、萬雷の如く萬濤の如き齊唱、眞に霄壤を震撼し天涯地底に通ず。やがて再び靜謐にかへり、一同最敬禮の中に天皇陛下には、長くも御舉手を以てこれを受けさせ給ひ、水野社會課長の御先導にて御召車に乗御、午後一時八分發御、停車場通を右へ根室驛に向はせらる。

沿道奉拜者は猶萬雲の凝れるが如く、御道筋の兩側を埋め赤誠を傾けて奉送、驛前及驛頭の特別有資格者亦謹みて聖駕を送り奉る。

天皇陛下には、根室驛に著御あらせられ、直に御召列車に乗御、供奉諸員を隨へさせられ午後一時十分根室驛御發、宮廷列車は二條の軌道を滑るが如く進御、御恙もなく釧路に還御あらせらる。

抑、道民奉迎の御行事の行はるゝことは我國未だ嘗て前例なき尊き御事に拘はり、北邊僻陬の地に在る赤子に對し御英姿を奉拜するの憚びを得しめんとの有難き大御心に出でさせ給ふ所にして、下萬民は面たり天顔に咫尺し奉るの光榮に浴し、忱に恐懼感激措く能はざるものあり。

斯くて御駐蹕一時間にして 行幸の御儀は滞りなく畢らせらる。

侍從御差遣

天皇陛下には、陸軍特別大演習並地方行幸の御砌、長くも本道諸般の施設に大御心を垂れさせ給ひ、道内各地に侍從

を御差遣あらせられ、親しく民情を視察せしめられ給ひしが、當町に於て其の光榮に浴したる箇所及日程左の如し。

根室飛行機不時著陸場

北海道廳立根室商業學校

御 日 程 (拔萃)

御 使	遠藤 侍從 武官
隨 員	青 柳 宮 内 屬
嚮導官	大矢根室支廳殖産課長
係 員	水 谷 屬

九月二十八日

午前八時四十七分

釧路驛御發

午後零時十分

根室驛御著 (鹵簿に入る)

同 一時八分

根室驛御發

同 一時二十三分

根室飛行機不時著陸場御著

同 一時三十四分

同 御發

同 二時五十分

根室驛御著

午後三時

根室驛御發

二三

御使	岡部侍從
隨員	堀宮内屬
嚮導官	福原根室支廳長
係員	佐藤農林主事補

九月二十九日

午後零時三十四分

帶廣驛御發

同 九時六分

根室驛御著

同 九時七分

同 御發

同 九時十四分

御宿舍御著

九月三十日

午前十時三十分

御宿舍御發

同 十時三十六分

根室商業學校御著

同 十一時一分

同 御發

同 十一時三分

根室驛御著

同 十一時五分

同 御發

根室飛行機不時著陸場 九月二十八日

遠藤侍從武官には青柳宮内屬以下隨員を隨へ自動車を以て大矢根室支廳殖産課長の嚮導にて、九月二十八日午後零時三十五分根室飛行機不時著陸場に御到着、鴨崎所長の案内にて直に御休憩室に入らせられ、御休憩時餘にして更に伺候室に於て、和田少佐の伺候を受けさせられ、鴨崎所長の現状申告、各箇所の御説明を御聴取の後、場内外を御巡覽あらせられて御歸還、午後二時三十五分根室驛御出發あらせらる。

北海道廳立根室商業學校 九月三十日

岡部侍從には堀宮内屬以下隨員を隨へ自動車を以て福原根室支廳長の嚮導にて、午前十時三十六分北海道廳立根室商業學校に御到着、大和田校長の案内にて直に御休憩室に入らせられ、福原嚮導官の紹介にて大和田校長、松尾根室町長の伺候を、大和田校長の紹介にて太田教諭の伺候を受けさせられ、大和田校長より校務を御聴取の後、校内を御巡覽あらせられて御歸還、午前十一時一分根室驛御出發あらせらる。

根室飛行機不時著陸場及北海道廳立根室商業學校の概要左の如し。

根室飛行機不時著陸場

一、位置 根室郡根室町字花咲港

二、沿革 昭和七年十月著工、昭和八年十一月竣功

二三

三、代表者 一定せず

北海道廳立根室商業學校

一、位置 根室郡根室町字大正町三番地

二、沿革 明治三十九年二月二十七日北海道廳立根室實業學校創立、同年四月公立北斗小學校を假校舎として

開校、同四十一年五月校舎新築、大正三年十二月北海道廳立根室商業學校と改稱

三、職員 校長 大和田誠壽、教諭 一七名、教諭心得 二名、囑託教師 二名、書記 一名、書記心得 一名、校

醫 一名

四、學級及生徒數 學級數 一〇學級、生徒數 四二一名

五、卒業生數 一、〇三二名

六、設備 敷地坪數 八、七〇四坪、建物坪數 七七八坪

賜 謁

根室公會堂に於て列立拜謁を賜はりたる者左の如し。

資格	住所	氏名
高等官三等正五位勳四等	網走町南九條東五丁目二番地	押川 東太
高等官三等待遇從五位勳六等	根室町字大正町三番地	大和田 誠壽
高等官三等待遇從五位勳六等	根室町字朝日町三丁目十番地	坪谷 俊治
正七位勳四等	和田村字厚床	原 運市
高等官四等正六位勳六等	根室町字敷島町三番地	岩池 政二
高等官四等待遇正六位	根室町字松本町二丁目三番地	鐘崎 孝一
高等官五等待遇從六位	根室町字大正町三番地	太田 金次郎
高等官五等待遇從六位	根室町字清隆町一丁目二十一番地	齋藤 孝治
從六位勳六等	紗那村字紗那	木村 擔三郎
從六位勳六等	藁取村字藁取	川畑 孫市郎
從六位勳六等	根室町字月ヶ岡五四三番地	藤田 義雄
從七位勳六等	齒舞村大字瑤瑤村多樂島	大西 惠隣
從六位	根室町字松ヶ枝町三丁目二番地	手島 胤則
高等官六等待遇正七位	根室町字清隆町一丁目四番地	盛山 兵護

高等官六等特選從七位	根室町字光和町七番地	大鹽	二六
高等官七等從七位勳八等	根室町字月ヶ岡五四一番地	大越	
高等官七等特選從七位	根室町字幸町五番地	和田	佐一郎
從七位	別海村大字別海村字別海	山口	英司
高等官七等特選從七位	根室町字清隆町一丁目二十二番地	財原	愛治
從七位	標津村字武佐	阿部	進
正八位	標津村字標津	佐々木	孝
正八位	齒舞村大字瑤瑤村字瑤瑤	安孫子	助
正八位	別海村大字厚別村字上風連	春日	織作
正八位	和田村字厚床	土岐	明
正八位	齒舞村字齒舞	鈴木	卯三
正八位	標津村字中標津	飯田	作太郎
道會議員	根室町字綠町三丁目二十一番地	小池	貞一
東北海道漁業組合聯合會長	根室町字鳴海町四丁目十九番地	阿彦	豊郎
帶廣市に於て賜調			

正八位
根室町字清隆町三丁目四番地
高橋正男

天機奉伺

九月二十八日根室公會堂天機奉伺所に於て記帳をなしたる者左の如し。
根室公會堂に於ける賜調者に同じ。

天覽陳列品

九月二十八日根室公會堂に於て天覽に供し奉りし品目左の如し。

- 一、根室千島兩國模型
- 凡 横四尺縦七尺のもの
- 一、鮪 冷凍魚 一個
- 一、大 鮪 同 一尾
- 一、鮭 同 二尾

- | | | |
|----------------|-----|----|
| 一、鱒 | 冷凍魚 | 二尾 |
| 一、タラバ蟹 | 同 | 二尾 |
| 一、花咲蟹 | 同 | 二尾 |
| 一、毛蟹 | 同 | 二尾 |
| 一、海扇貝 | 同 | 五個 |
| 一、北寄貝 | 同 | 五個 |
| 一、根室千島兩國島瞰圖 | | 一枚 |
| 一、根室町を中心とする同上圖 | | 一枚 |

天覽漁船並漁具

九月二十八日御道筋海岸町海濱に於て天覽に供し奉りし漁船並漁具左の如し。

- 蟹刺網漁船、鱈延繩漁船、鮭鱒流網漁船、鰈手繰網漁船、機船帆立曳漁船、手巻帆立漁船、海鼠桁漁船、昆布採取船、鱈流網漁船、捕鯨船

體驗奏上

貿易功勞者 藤井太吉氏

天皇陛下には、本道各般の産業上に深き大御心を注がせ給ひ、地方行幸の御砌、札幌御駐轡中行在所に於て、宮内大臣の傳奏を以て本道各地の産業功勞者の體驗を聽召され給ひしが、其の光榮に浴したる根室町藤井太吉氏は當時七十歳、慶應三年九月十日新潟縣に生れ、明治二十五年根室に移住（今より四十五年前）、昆布採取を業としたるが、明治四十二年より海産貿易を開始し、海産商權の確立と販路開拓に専心努むる所あり、或は内地府縣と直取引をなし、或は昆布輸出の端緒を拓きて對支貿易の嚆矢をなし、明治四十四年を始めとして前後六回、上海より北支那各地を視察し物資消流の實狀を調査研究したる等、實に昆布輸出業の先覺者たり。

今上陛下、御即位御大禮の砌には産業功勞者として御賜候の光榮に浴し、昭和七年十一月二十八日には日本産業協會總裁伏見宮殿下より華族會館に御召あり、産業功勞者として表彰狀を御親授賜はりたるの外、各種團體より功勞を彰せられたること多し。

上聞に達せられたる奏上文左の如し。

謹みて申し上げます。

本道は昆布の世界的産地で御座いまして、その種類も非常に多いので御座いますが、海外に輸出せられますものは大體根室、釧路地方産の長切昆布で御座いまして、本道産昆布と致しましては品質も低く、價格も比較的安いもので御座います。

尙長切昆布と言ふ名稱は長く切つて結束致しますので、かやうな名前が出来たと言はれて居ります。

本道の昆布が海外に傳はりましたのはかなり古いことと承つて居ります。即ち往時本道産の昆布が北陸方面より京阪地方に入り、支那人が土産品として持ち歸つたのがその始めであると傳へ聞いて居ります。しかし相當の數量に纏まり直接輸出商品として取扱はれたのは比較的新しく、安政六年支那商人陳玉松が函館へまゐりまして、昆布一千石を百石金六十八兩で買入れ、更に翌年度の買入契約をなし證據金として金三千兩を供託し、商談を成立せしめたのが始めであると聞いて居ります。

爾來漸次進展の一路を辿りましたが、其の後明治五年に至りまして、開拓使の御用達で榎本六兵衛といふ人が主唱し開進舎といふ貿易會社を創設し、大いに本道海産物の支那輸出に努めました但其の成績良好ならず、遂に明治十年四月に至つて上海にありました店舗を閉鎖するの止むなきに至りました。

これより先、資本金四十萬圓を以て廣業商會といふ會社が設立せられ、大いに各生産地と聯絡をとり昆布の對支輸出に努めました、これも亦業績が振はず、數年ならずして遂に倒産するの餘儀なきに至りました。

越えて明治二十二年五月に日本昆布會社といふ同種の會社が出来まして、廣田千秋といふ人が官選されて社長となり、一百萬圓の大資本を以て本道の東海岸全線に亙る昆布生産地に對し極めて巧みな統制網を敷き、上海に支店を置く等、生産、販賣の兩方面に對して頗る周到な用意を以て之に臨み大いに商權の確立に努めました、不幸にして目的を達する事が出来ませず、この會社も遂に明治二十七年四月に閉業するに至りました。

この様に有力な會社が次々と失敗する原因は素より色々ありませうが、要は函館在留の支那商人が本國と氣脈を通じて執拗巧妙な反對運動をしたためと考へられます。

前に申述べました日本昆布會社の倒産後は本道昆布の統制は全く亂れまして、その價格の如きは全く支那商人の意のままに左右せられ常に變動極りなく、生産者、取扱商人は共に頗る不安な状態に置かれて居りました。

この時に當つて、本道昆布總生産額の二分の一を占める大産地である我が根室地方に於きましては官民一致、如何なることがあつても此の貿易商權を完全に我々の手に收め、その利權を確保すべく慘憺たる苦心を致しました結果、先づその第一歩として根室港より直接輸出の道を開くべく、税關支署を根室町に設置せられたき事を當局へ懇請致しましたる處、幸ひ採擇せられまして、明治四十三年六月に根室税關支署が開設せられるに至りました。それで更に一步を進め、翌明治四十四年二月には第一回支那視察團を組織し、一行九名は彼地に涉り、上海、鎮江、南京、漢口に至り、更に宜昌、長沙等を訪れて歸來の上、當時上海にありました大倉組支店と連絡を圖り大いに直輸出に努めまし

た結果、同年には根室港より十一萬七千餘圓の輸出記録を留めるに至りました。

翌明治四十五年から引続き第二回、第三回と支那南北に互つて視察團を送り、鋭意取引の増加に努めましたる處、支那商人はこれを大いに怖れ、手段をつくして種々惡辣を極めた妨害を試み、そのため私共は屢々苦境に立ちましたが、これに屈せず専ら商權擁護のために苦心努力を続けました結果、幸にして好成绩を續け、大正七年より大正十三年に至る間に輸出は漸次活況を呈し年額三百萬圓を超えるの状況となりました。

然しこの間、明治四十一年に南支に起つた辰丸事件に端を發し彼の國民は日貨排斥の第一聲を擧げ、其の後機會ある毎に本邦商品に對して盛んに排斥運動を爲し、回を重ねるにつれ次第に激しさを増し、昭和二年に起りました第七回目の日貨排斥は實に深刻を極め、従つて昆布價格の如きも、盛時には百石二千四百圓以上で賣買されましたものが、昭和二年以後は大暴落を演じまして、昭和五、六年に至りましては實に三百圓でも猶且つ賣れ行が思はしからぬ悲境に陥り、根室地方は滯貨十萬石を擁して空しく不況の裡に沈淪するに至りました。これ等の原因は畢竟しまするに、支那に於ける日貨排斥が直接の原因たるは論を俟たぬ所でありますが、その反面には販賣上甚だ統制のない事も又その一因たる事は争ふべからざる事實でありますので、茲に同志が相謀りまして、昭和六年六月北海道廳の指導の下に北海道昆布輸出組合を創設し、秩序ある統制の下に新販路の開拓に努め類勢挽回に盡瘁致しましたが、恰も同年九月萬寶山事件の突發に遭ひ日支國交は愈々險惡となり、次いで七年には上海事變が繼起し、同年五月漸く一應解決せられました。突如として殆ど禁止税の如き高率な輸入關税を設けるに至りました爲、昆布百石に對して約七百圓即

ち原價以上の高率な税を課せられましたので、一時は輸出絶望とまで見られるに至りましたが、當局の處置が宜しきを得約二割三分の減税となりました。

これに力を得て私共當業者一同は専ら隱忍自重の上、商略を練りました結果、輸出は其の後漸次好轉して参り、併せて新興滿洲國に對する輸出も増加して参りました爲、價格も逐次回復し、昭和九年度は輸出額が百二十六萬圓に達するに至りました。

以上の様な經過を経、萬難を排し輸出貿易のため努力して参りました私共當業者一同は、明治初年以來幾多の先輩の残されました貴重な經驗を基礎と致しまして愈、その結束を固くし、一層販路の開拓と擴張に努め、各種海産物の對外輸出を増進せしめることによりまして微力ながら邦家のため、又地方のため何程かの貢獻を致し、以て聖恩の萬分の一に對へ奉らん事を期する次第で御座います。

優良青年 島 田 穎 二 氏

天皇陛下には、青年教育の上に深き大御心を垂れさせ給ひ、地方行幸の御砌、札幌御駐轡中行在所に於て、宮内大臣の傳奏を以て本道各地の優良中堅青年の體驗を聽召され給ひしが、其の異例の光榮に浴したる根室町島田穎二氏は當時二十二歳、大正四年二月十七日國後島東沸村に生れ、昭和二年三月東沸尋常小學校卒業と共に根室町川口實藏雜貨店に入店、爾來直實勤勉、世流の浮華に染まず、一意専心主家の業に勵み營々孜々怠りなく、其の青年訓練所に入所

するや、弱冠の身を以て率先知己朋友を誘ひ衆人に奨め、學に就きては思想堅固、黽勉一日として缺くところなく、其の精勵他の模範たり。自己一身の利害を外にし得失に惑はず、十年一日の如く奉公の至誠を盡して自ら主家の繁榮を致さしむる等、其の資質甚だ優良なるものあり。

上聞に達せられたる體験奏上文左の如し。

謹みて申し上げます。

私は千島國國後島東沸村に生れ、昭和二年東沸尋常小學校を卒業と同時に、當時十三歳で知人に連れられ根室町に参り、現在の川口雜貨商店に勤め今日迄十ヶ年奉公致して居るので御座います。

生來内氣な私は故郷を離れ實社會の荒波の中に入りましたので、稍もすると悲しく獨り涙することも度々で御座いました。或時は寒風に晒されながら露店の商賣に足は冷え、手はかがみ、烈しく睡魔に襲はれ、自分の體でありながら自身ではない様な氣持がし現は何處かに消え行く様に思はれましたことや、濃霧咫尺を辨じない夏の日、氷原を吹き來る寒風に肌刺さるる冬の夜を、重い荷車を曳き長い坂道を行く時等は五歩歩みでは止り、十歩出では息づき、汗は眼に入り、全身の血は逆流するの思ひが致したこともあり。日中の業務を終へて夜、帳簿の整理に机に向ふ時は一時に疲れが出て参りまして烈しい眠に襲はれますので、其の時は頭を冷水にて冷し、又手拭にて縛りまして眠を醒し、職務を果しましたが、あまりの困難に堪へかねて内氣な私は幾度か業務を抛たんと思つた事で御座います。

然しながら懐しい故郷、あの東沸の小學校に學び居たりし頃、先生方の御薫陶、中にも朝な夕な奉讀致しましては涙ぐみし御勸語「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ」との御訓の深く有難きを想ひましては、心弱い自分を叱り勵まし幾度か奮ひ起つたことで御座います。そして主人の迷惑は親への不孝を思ひましては耐へ忍んで参つたので御座います。

私が歸省致しました時、ひそかに父母に語りますと、父は其の様な心弱き事では何事も大成をなし得る事は出来ぬ、大なる強き心になれと終始激勵して下さいました。主人も我子同様に慈しみ下さいまして、朝な夕なに體験談や訓戒をなされ、日夜私共と勞苦を共にし引立て下さいましたので、二年、三年と過ぎる内に自然商賣に興味を覺えまして、店の爲一層の勵みが出て参りました。主人は又講義録を購ひ下されましたので、雨の日、冬の夜、小閑を利用して懸命に勉強致して参りまして、よりよき店員となる事に心掛けて参つたので御座います。

然る處、昭和七年一月主人は私を北斗青年訓練所に入所致させ下さいました。此の訓練所こそ我々青年の一大修養道場と思つて熱心に勉強致して参りましたが、日一日と店務が多忙となる其の中を毎日出所致させ下さる主人の心境を思ふと、私はただもう此の恩義に對して如何なる困難も突破するの意氣を以て、主家の繁榮に心を碎き能ふ限りの努力を盡して参りました。訓練所に於ては主事指導員殿の熱心なる御指導と、又町の各有志の方々や査閱官殿の尊い教訓に、益々信念を固くして奮ひ起つたので、主人を始め社會の人々も信用して下さいましたので感謝の念で一杯で御座います。

徴兵検査に際して兵役を免ぜられし事は誠に男子の不面目と残念至極に存じましたが、然し獨り軍務に著くのみが忠義の道を盡すものではなく、各自職務に忠實なるを以ても道であると悟り一大發心致しまして、主人の恩は勿論、今日迄教へ導き下さいました社會の人々の御恩の萬一に報ゆる決心にて、今後、正直、親切、確實專一に進み行く覺悟で御座います。

賜 饌

天皇陛下には、十月六日札幌市北海道帝國大學グラウンドに於て大演習關係者を始め各方面の功勞者に對し、大御心畏き御賜饌の御儀を行はせられ給ひしが、根室支廳管内功勞者にして此の光榮に浴したる者左の如し。

住 所 (官公職)	氏 名
根室支廳長	福 原 政 二 郎
地方農林技師	大 鹽 紀 糺
根室町長	松 尾 豐 次
齒舞村長	廣 瀬 圓 藏
標津村長	植 松 適

一家ヨリ五人以上ノ現役軍人ヲ出シタル家族
公私立小學校長

各種功勞者(實業、産業)

奏任文官

各種議員

別海村長	原 熊 一
泊 村 長	大 澤 敏 雄
根室町字朝日町一ノ二〇	山 下 鐵 藏
公立北斗尋常高等小學校長	高 橋 正 男
公立標津尋常高等小學校長	佐 々 木 孝
根室町字本町四ノ五九	藤 井 太 吉
同 字平内町三ノ二〇	中 島 義 一
同 字花咲町三ノ五	兼 古 萬 吉
根室町字朝日町三ノ一二	坪 谷 俊 治
同 字大正町三	大 和 誠 壽
根室町字緑町三ノ一三	中 山 一 郎
同 字梅ヶ枝町三ノ九	小 林 惣 吉
根室町字本町二ノ一九	竹 原 平 太 郎
同 字梅ヶ枝町三ノ七	延 原 重 男
同 字寶町三	石 橋 榮 之 助

各種議員

根室町字常盤町一ノ六	碓氷	勝太郎
同 字本町二ノ六	佐野	忠三郎
同 字本町四ノ四八	稻垣	龍
同 字本町三ノ二	八木	安太郎
根室町字榮町支廳官舎	吉田	榮吉
同	大矢	純義
同 光和町鐵道官舎	福田	清
同 彌榮町警察署長官舎	大島	義孝
上齒舞村巡查駐在所	篠原	千代吉

御紋菓拜受

天皇陛下には、地方行幸に際し本道各地の高齢者並戦病死軍人遺族、傷痍軍人、篤行者に對し、畏くも御紋菓を御下賜あらせられ深き御仁慈を垂れさせ給ひしが、根室町に於ては十月六日恰も御賜饌日を期して之が傳達を行ひたり。御紋菓の拜受者左の如し。

高 齡 者

住 所	氏 名	生 年 月 日
根室町字綠町二丁目一二番地	須藤 サヨ	天保十四年十二月八日
根室町字定基町三丁目一番地	川端 クン	弘化元年四月三日
和田村二四三番地	田中 茂	弘化元年十二月一日
齒舞村大字瑠璃瑠村水晶島字秋味場番外地	橋本 せき	天保五年十二月十日
標津村字俣落三一ノ八二	上村 傳之助	弘化二年五月五日
標津村字標津一三番地	後藤 トクヨ	弘化四年八月十日
標津村字中標津三條四	村上 ゆき	弘化四年六月十五日

軍 人 遺 族

職 名	氏 名	遺 族 所 在 地	代 表 者
官 等 死 者			
歩兵一等兵	遠田 吉久	根室町字彌榮町	遠田 忠吉
同	土師 徳太郎	同 字岬町	土師 末吉
同 二等兵	吉村 船吉	同 字松本町	吉村 マツ

步兵曹長	吉井 齋	弟	根室町字光和町	吉井 功
同 上等兵	増田 雅一	父	同 字岬町	増田 市太郎
同 伍長	福澤 榮作	父	同 字千鳥町	福澤 永作
同 中尉	佐藤 隆太郎	長男	同 字本町	佐藤 重夫
同 一等兵	齋藤 兵藏	同	同 字沙見町	齋藤 好
同 伍長	三浦 保太郎	妻	同 字清隆町	三浦 アサ
同 二等兵	廣谷 淺次郎	弟	同 字千鳥町	廣谷 金次郎
砲兵一等兵	平川 芳太郎	弟	同 字辨天町	平川 松太郎
海軍三等水兵	清水 五八吉	妻	同 字平内町	清水 ヨキ
步兵一等兵	高根 銀治	長男	和田村字幌茂尻村	高根 ヨシ
同 上等兵	新濱 與三松	母	同 字落石村	新濱 よし
同 一等兵	森 末太郎	兄	同 字昆布盛村	森 久治
同 上等兵	吉原 勘吉	長男	齒舞村字齒舞	吉原 勇策
同 中尉	田中 良一	父	同 字瑠璃瑠村	田中 福松
三等看護長	佐藤 清	養父	同 字沖根邊村	佐藤 吉五郎

步兵二等兵	馬場 仁平	妻	別海村字厚別村	馬場 はるよ
輜重兵特務兵	武藤 富雄	長男	別海村字平糸村	武藤 亮之助
步兵上等兵	永野 富治	父	同	永野 富藏
同	安部 豊後	父	同 字厚別村	安部 豊治郎
同	四栗 豊藏	妻	同 平糸村	四栗 トヨ
同	大内 惣作	妻	標津村字武佐	大内 千代乃
工兵上等兵	横井 徳之助	養父	同 字古多糠	横井 松四郎
步兵上等兵	村山 春吉	弟	同 字咲無異	村山 辰藏
砲兵伍長	梅田 博	父	同 字川北	梅田 磯次
步兵一等兵	藤田 福太郎	弟	同 字中標津	藤田 道一
同 上等兵	福原 金藏	父	同 字標津	福原 金吉
步兵二等兵	小鹽 倉之助	母	同 字開陽	小鹽 おせ
同 一等兵	小谷 壽太郎	兄	同 字標津	小谷 愛治
海軍一等水兵	小野 龜次郎	妻	同 字中標津	小野 よね
同 二等機關兵曹	佐藤 甚吉	父	同	佐藤 重次郎

步兵上等兵 福永晋五郎 妻 羅白村字羅白 福永志乃ぶ
 同 一等兵 新久男 妻 同 字キソトウシ 新チヨ
 同 川口 薦 兄 留別村字留別 川口 勇

傷 痍 軍 人

住 所

受傷當時ノ兵科官等

氏

名

根室町字花咲町二丁目十四番地 步兵一等兵 遠山 八十八
 同 字光和町二十七番地 同 上等兵 井上 伊勢吉
 同 字花園町八丁目十一番地 同 一等兵 平岡 和五郎
 同 字清隆町一丁目二十四番地 同 上等兵 高岡 武雄
 同 字本町四丁目十三番地 同 同 海老原 善治
 同 字常盤町三丁目一番地 同 同 望月 吉延
 齒舞村大字瑠璃瑠村八 同 同 本多 米藏
 別海村大字平糸村字上春別五十九線北六 同 同 三星 半之助
 同 五十九線北七 同 同 三枝 清作
 同 大字上西別四十五線百三十五番地 同 同 高橋 傳次郎

同 大字平糸村字上春別六線北七 同 同 鈴木 英三郎
 同 大字別海村字西別市街 同 同 菅田 長右工門
 同 大字平糸村字上春別六十一線南六 同 同 中洞 要助
 同 字上春別五十三線北二十五 同 同 石川 嗣平
 同 字上春別五十二線南十八 同 同 佐藤 源藏
 同 字上春別五十四線南三十三 同 同 遠藤 兼松
 同 標津村字標津百六十番地 步兵一等兵 藤元 教吉
 同 字武佐南九線四十八 同 同 岡村 忠孝
 同 字武佐南九線西三十一 同 同 杉野 繁次
 同 字中標津 同 同 西村 主槌
 同 羅白村字知西別番外地 同 同 濱屋 菊次郎

篤 行 者 (孝子)

住 所

氏

部

標津村字武佐

渡

菊

美

天覽成績品

旭川師範學校及十勝農業學校に於て天覽の光榮に浴したる成績品左の如し。

旭川師範學校陳列

書き方

- 擇捉郡入里節尋常小學校
- 根室郡北斗尋常高等小學校
- 同 花咲尋常高等小學校
- 擇捉郡留別尋常高等小學校
- 根室郡北斗尋常高等小學校
- 標津郡川北尋常高等小學校
- 野付郡西別尋常小學校
- 根室郡花咲尋常高等小學校
- 根室郡和田尋常高等小學校

大 土 伊 石 新 山 石 笠 西
 ワ キ 田 井 田 本 山 卷 村
 サ ヨ 藤 井 田 本 山 順 一 一
 ツ フ 一 宜 武 一 子 郎 エ

圖 畫

- 花咲郡華岬尋常高等小學校
- 國後郡國後尋常高等小學校
- 根室郡花咲尋常高等小學校
- 目梨郡羅臼尋常高等小學校
- 根室郡北斗尋常高等小學校
- 同 花咲尋常高等小學校
- 北海道廳立根室高等女學校
- 同 根室商業學校
- 同
- 根室郡北斗尋常高等小學校
- 同 花咲尋常高等小學校
- 同
- 擇捉郡留別尋常高等小學校
- 花咲郡共和尋常高等小學校

細 佐 伊 川 高 兼 關 古 谷 泉 割 大 澤 瀧
 越 藤 香 島 橋 古 根 谷 藤 澤 方 橋 田 本
 ト 美 昌 ス 鎮 宏 英 博 祥 一 隆 忠
 キ 惠 三 エ 夫 三 子 司 敏 實 一 ら 悦 夫

手藝

根室郡幌茂尻尋常小學校
同 花咲尋常高等小學校
同 北斗尋常高等小學校
標津郡上標津尋常高等小學校
同 中標津尋常高等小學校
目梨郡春松尋常高等小學校
根室郡北斗尋常高等小學校
同 花咲尋常高等小學校
國後郡禮文磯尋常高等小學校
北海道廳立根室高等女學校
同 根室商業學校

色丹郡色丹尋常小學校

上野政見 豊原幸吉 西本昌子 菊地保子 潮野昇 松原隆一 武田喜代三 今野三郎 平川三郎 笠巻君江 三宅正治 馬場裕子 遠藤ノブ 波越ノブ

研究調査物及製作品

北海道廳立根室高等女學校

春日節子 松村文子 川上アイ

十勝農業學校陳列

色丹郡色丹尋常小學校訓導

大野笑三

研究調査物及製作品

北海道廳立根室高等女學校教諭

金谷威 齋藤孝治 杉山基 北海道廳立根室商業學校

御下賜金品拜受

天皇陛下には、陸軍特別大演習並地方行幸に方り、畏き御思召を以て、根室町及根室町長並山口助役以下行幸關係

武京下近伊清高松石清山佐杉河諏本富萩編譽齋內
政免出藤香水坂村井水本木本野訪間樞原 田藤山
喜朝龜定駒林德甚政留連萬武次庄吉甚直仁吉勸話
作吉松郎郎松郎藏治平藏治夫作衛郎助吉郎郎六吉

伊加鹽吉大中鳴丸井住高北斗小學校
藤藤貝田田村原山岡山橋崎 濱和岡山松種川淺佐
久貞四定一金フ良昇正 四甚勝善莊政熊元卓政
雄雄郎雄敏二助ミ治郎男 四四名 作平助次郎郎爾郎

青石木佐田井野後緒春高猪山染宮細山大西廣
計 山橋根藤川野田藤方日橋田澤谷脇井口內井鳥
三 富キト 元キキイ 清哲 正信勝武道賢ト
一名 信男ヨエ武保ミエチ裕士夫弘二雄芳雄芳司ミ

廣津高西井多劑師計 茂淺山仲幸有井長長牧田飯小師
瀨田橋島岡田會 又野本俣鳥光上沼川野鳥田野會
謙義忠繼銀睦 一勝 一謹春藤千吉德千久 昌
治重郎男藏洋 一三名 雄修雄郎夫郎秋平途治憲博信

根室町電氣局

荒平宮佐小濱木竹加岩岩大西和長佐兒辻松松山
木田下藤西野津中藤谷谷友田泉尾木玉 村本本
柳源與正正德保貞秀種吉龜貞平慶房二正征成秀
治郎松松雄門二郎雄治治郎郎郎三吉一郎一壽藏

町會 道會 町立
久富佐田田會 安小會 佐立
保山藤中員 藤池員 藤 友坂辻新島木渡堀佐
有政黨敬 二石貞 利 三喜良吉榮勸幸早正茂
仁吉明義 名典郎 一名 〇名七郎尙藏一郎郎雄平太郎

石竹小中高春高安久確古野佐山兼熊小吉延田
計 橋原林山山樓橋藤保永澤口藤本古谷寺田原中
二榮平惣一 廣文武 勝幸 次政國正近六圭重
四名 之太 郎吉郎繁雅平雄習郎門作吉助治吉郎介男治

今齊上近村山鈴濱河中武根佐 青木手枳正岡
野藤野藤川本木崎原野藤塚藤長 木原鳥殼木 員
重藤竹留爲傳留幾茂豐四與德 重芳胤萬莊伊
次次 次次 次次 次次 六名 雄輔則郎三助

火防組計
 伊兼齋紀成中今川坂割南高汲下
 藤古藤谷田一村端井方代橋川田合
 政萬政常三作源覺小要喜彌彌
 吉吉市吉松郎郎郎郎異松治市郎
 五二名
 長谷川 佐木 加藤 櫻井 鈴木 横山
 虎 忠 千和 奥
 雄 一 郎 助 次 藏

衛生組計
 吉笹渡藤高宮岡福中飯安桑眞中枳新辻小小前星
 岡原邊村橋本 田部鳥藤野柄山穀富中林鳥川野尾
 重文 兵鐵又伊定和三十金藤慎元光外忠勝直金揆三
 義次郎雄 左衛門藏郎郎吉司郎六郎司吉郎治夫治澄郎郎治
 一三名

藤梅齋松日越小寺梶澁及川立松佐稻島寺大植旭淨
 鳥谷藤原向後川鳥原谷川村花野木田平村村田 土
 龜周宗良吉彌幸清 長末 銀重 辰太常常喜與
 太郎造一吉彌郎作司積進郎治勇松雄勇郎吉七藏治助

道民奉迎場引率者 計 五八名
 赤浦和谷種龜森作佐田鈴小坂清山佐綱佐久萬
 松濱泉原村田田田木中木川倉水本木本田田年
 三菊賢清卓由岩定三政潭新常末連菊常榮喜敬
 郎郎二高藏門郎吉郎郎一郎郎郎城一補藏郎吉

根室救難所計
 新和早小住高上 鍛中田重得山鳥久得濱濱
 谷田坂樋友坂田 冶村代永能口田田能崎崎
 榮 捨 金勝久 一 太次三辰利増正小作
 三 之 次 一 郎 三 行 市 次 市
 郎 翠 助 巽 郎 三 七 茂 實 吉 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎
 六九名

自願婦人會計
 佐藤生 確久植平九柳村佐山森萩本今
 野鳥合 水田田岡山谷口藤石 原田井會
 忠龜 一 み つ き と さ き タ さ ち し 千 り 一 雄 鶴 喜
 三太 三 や る 五 し と 清 ん エ と さ ん 代 ん 〇 名 一 郎 藏 郎
 郎 郎

岩乾小星有小川吉伊鈴桑大通小近福籠西池平成石
 瀨 野山海内口田澤木原塚藤林松原宮垣田岡田黒
 千庄又武喜丑寅吉麟由周恒澁七安嘉澤董 桂伊才
 治郎郎郎郎郎藏松 藏 郎 吉 利 次 郎 平 藏 一 秀 郎 郎 吉

作佐北稻古經守前金目飛寺村花稻久西本品鳥山照
 田藤川葉川塚谷川子黒澤村上井村野川城田津本井
 幸正喜房留友金金隆重德太佐岩願 幸文金由傳治
 一吉郎吉吉造郎郎藏郎藏 郎 藏 吉 市 吉 司 卿 吉 雄 藏 郎 藏 郎
 八 次 太 三 藏 郎 藏 吉 市 吉 司 卿 吉 雄 藏 郎 藏 郎

中島 太吉
佐藤 榮次郎
小出 義雄
平田 正治
飛田 虎次郎
吉田 誠一
渡邊 菊藏
新濱 與次郎
塚本 與四郎
藤本 一藏
久保田 由藏

野瀬 篤平
坂口 藤義
青沼 信一
藤野 一義
山崎 光直
角田 正吾
廣田 毅雄
對馬 喜造
高木 正一
高屋 政吉
清水 仁三郎

鈴木 眞助
眞鍋 通夫
佐藤 伍一
佐々木 雄一
平山 吉一
遠藤 安次
辻治 一
小林 三太郎
飯澤 芳松
住吉 幸太郎
得能 安次郎

五六
秋田谷 豊次郎
佐々木 清三郎
高島 市吉
鈴木 茂市
早坂 市
星山 乃
長沼 乃
計 六〇名
計 五九一名

謹 話

聖駕を迎へ奉るに際して

根室支廳長 福原政二郎謹話

我々管内八萬の蒼生が只管御待ち申し上げて居りました地方行幸が先般仰せ出されまして、當地は愈々、本月二十八日に聖駕をお迎ひし奉ることに相成つて居ります。曩に行幸御内定の際申し上げました如く、本道東端偏陬の地我が

根室地方に迄鳳輦を迎へ奉ることは洵に千載一遇の光榮で御座いまして、宏大無邊の聖恩に恐懼感激して居る次第で御座います。

去る二十四日宮城御發轍以來、玉體彌々御健かに涉らせられ、長途の御旅程御恙あらせられず、鶴首御待ち申し上げました御英姿天顔を咫尺に拜し奉る日の有難さに、彌々感激を新にし歡喜に満ち満ちて居る次第であります。管内は周知の通り國防竝に北洋産業進展上、對外的に交渉を有する重要位置にありまして、曩には北海僻遠の千島諸島に侍従御差遣を賜り、更に親しく鳳輦を枉げさせ給ふことは特別の御恩召を拜せられ、只々御鴻恩の有難さ勿體なさに感泣するのみであります。幸にして目下の處天候其の他に惠まれました、諸般の準備も順調に進捗しつゝありまして、私共其の衝に當りますものは此の御盛儀に聊の遺漏不敬もありません様、戮力協心日夜精勵致して居る次第であります。

聖駕を迎へ奉るに方りて

根室町長 松尾豊次謹話

道内稀有の豊穰に道民一同鼓腹擊壤する明朗の秋、石狩の廣野に於て舉行せらるる陸軍特別大演習に方り、長くも大元帥陛下には、時局極めて重大、且御政務御多端に涉らせらるるにも拘はらせられず、燦乎たる錦旗を北邊の埜に進めさせ給うて、氣候風土の激變をも顧みさせ給はず、親しく六師を御統裁遊ばされ、尙道内各地に行幸、拓殖の實

情を贖はせ給ふに當りまして、極東邊陲の我が根室町に特に聖駕を枉げさせ給ふことに仰せ出されたと洩れ承はり及びまして、寔に深遠宏大なる御聖慮の程拜察するに恐懼感激の極みであります。不肖豊次不圖も根室町民と俱に斯かる特別の恩召に由る千載一遇の行幸奉迎の大任を負ふことに相成りましたことは、眞に筆舌に盡し得ない光榮と歡喜とを恭感すると共に、此の大盛事に些かの遺漏不敬の有りませぬやうにと、著任勿々赤誠と決意とを披瀝し戒慎鋭意町勢の一般を研鑽致し、曩に樹てられたる周密なる奉迎計畫に準據し、當局の御方針に則り、各委員と協心戮力諸般の準備に萬全を期するため日夜粉骨碎心、只管及ばざらんことを懼れて設營の勞に當つて居りますが、幸に總てが順調に著々と進捗しつゝあるを見まする時に、歡喜の情自ら湧き起つて、畏れ多くも颯爽たる御英姿、麗はしき龍顔を咫尺に奉拜する至幸至福の日の刻々に近づきつゝあるを覺えまして、恐悅、感佩禁ずる能はざるの心境であります。唯、今より恐懼に堪へない事は、當方に陛下長途の御旅情を慰め奉るべき設備や素材に些か乏しいことであるが、せめて當日天氣晴朗にして金刀比羅神社境内の玉座に立たせ給うて、皇域千島列島の山光海色御展覧に御障りなく、皇風洽く及び、御滿悅に涉らせ給うやう、天地神明の御加護裕かなれかしと日夕二萬町民と俱に祈念して居る次第であります。

光榮に感激して

北海道廳立根室商業學校長 大和田誠壽謹話

畏くも 聖上陛下、曩に東宮に在しまして大政を攝し給ひたる頃、大正十一年本道御巡啓の御砌、特に御使を本校に遣はされ、職員生徒一同に對し親しく、御訓諭を垂れさせ給うたのであります。今回本道十一州の野に陸軍特別大演習を統べさせ給ふに方り地方行幸を仰せ出させられ、北限根室亦鳳輦の御幸を仰ぎ、親しく龍顔を咫尺に拜し奉るの千載一遇の光榮を辱う致しますは寔に恐懼感激措く能はざる處、此の御一事すら私共と致しまして盡し得ざる欣びでありますに、重ねて本校には復勅使御差遣の御優詔を拜しまして、産業並に教育の振興に御軫念あらせられ給ふ大御心の程、拜察申し上げるに畏き極みであります。就きましては職員生徒一致協力各、その本分に精勵致しまして、聖恩の萬一に應へ奉り、以て微力を皇運の扶翼に捧ぐる覺悟を固うする次第であります。

奉迎の佳き日に幸あれと祈りまして

根室北斗尋常高等小學校長 高橋正男謹話

本校々庭が今回道民奉迎場として使用されることに相成りましたことは、本校並に奉職員と致しましては斯の光榮

を永久のものと考えまして、之迄それ／＼の係の方々が日夜獻身的な奉迎場の設営に對して我校職員、兒童及び保護者も協力して些か奉仕精進致しましたが、今や殆ど完了して輝かしく嚴かな御盛儀の當日を只管お待ち申上げて居りますが、仰ぎ冀くは千載一遇の奉迎の佳き日に幸裕かに、總てが畏き御聖旨に副ひ奉ることを得させ給へと、吾等一同赤誠を籠めて御祈念致して居る次第であります。

御敬神の御聖徳に感激して

縣社金刀比羅神社々司 前 田 修 謹 話

我等國民が常に現つ御神と仰ぎ奉る一天萬乗の 聖上陛下が、斯の僻遠の地に鳳輦を進めさせ給ひ、具さに民情を體はし給うと共に草莽の臣に奉拜を許し給ふ事は、偏に厚き大御恵で御座いまして、御皇恩唯々感激の外御座いませぬ。

尙特に私共の欽仰し奉らねばならぬ事は 陛下の御敬神の御聖徳の厚く座しますことで御座いまして、此度も北海道行幸に際しまして官幣大社札幌神社、國幣中社函館八幡宮には行幸遊ばされ、御玉串を捧げられ御親拜あらせられます。

また全道の縣社には幣帛料を、招魂社には祭料を御奉納になり、中には御使を御差遣になる縣社も御座います。此の地方の縣社または招魂社に至る迄御奉幣になります事は全く破格の御恩召による事で御座いまして、恐懼感銘の

至りに存じます。

金刀比羅神社としましては境内に御展望所を御選遊ばされました關係上、長くも一ノ鳥居より玉歩を運ばされ給ひます事は神社の由緒に一大光榮を加へた譯でありまして、私共は永く此の光榮を銘記すると共に、益々敬神尊皇の赤誠を以て一意奉仕しなければならぬと期する次第で御座います。

聖駕を迎へ奉りて

愛國婦人會北海道支部根室聯合分會長 福 原 豊 子 謹 話

天高く氣澄み渡り黄菊白菊籬に匂ふ秋、輝く行幸の御盛儀を拜し奉りまして、洵に昭和聖代の御恩恵を衷心しみじみと感ずる次第で御座います。申すまでもなく私達國民の最も誇りと致しますのは、連綿として變ることのない萬世一系の皇室を上に戴いてゐることで御座います。更に誇るべきは天資御英邁御仁慈に涉らせ給ふ 陛下の御仁政で御座います。この御仁政は私共國民に大いなる歡びと力を御與へ下さいますので、國の力は愈々強く、國の威光はまことに世界の隅々にまでも輝いてゐるので御座います。之れが爲め親しく體はせ給ふ萬機は年と共に御多端を加へられて御寸暇もあらせられず、宵衣肝食も嘗ならざる趣洩れ承つてゐますだけに畏れ多い極みで御座いますのに、今度は陸軍特別大演習を御統べ遊ばされますのみならず、其の前後本道の各地に御聖駕を御枉げ遊ばされまして、親しく地方の産業、教育其の他諸々の事ども具さに體はせ給ふ事は、眞に恐懼感激に堪へない次第で御座います。殊に私共が本

道の東の端、しかも僻阪の根室におきまして聖駕を御迎へ申し、麗しき天顔を眼のあたりに拜し奉りました事はこの上ない光榮で御座いまして、窮りない御聖徳の有難さに唯、感涙に咽ぶのみで御座います。私はこの千載一遇の無上の光榮に浴し奉りましたについては、會員の皆様と相共に一層修養にいそしみ、婦徳の涵養に精進しまして昭和女性たるの本分を盡し、心と力を協せまして本會の發展に専念致し、以て御聖徳の萬分の一に酬い奉る覺悟を致さねばならぬと深く痛感する次第で御座います。

天覽の光榮に浴して

日本食料工業株式會社根室工場主任 勢頭 眞佐 謹話

豊饒の秋、當根室町に聖駕を御迎へするに際しまして、恐れ多くも當工場謹製の凍魚が天覽の光榮に浴しました事は洵に當工場の光榮でありまして、延いては我國低温工業界の榮譽とするところであります。

天覽を賜りました凍魚は我が根室の海の幸、鮎、鮭、鱒、タラバ蟹、花咲蟹、毛蟹、帆立貝、北寄貝でありまして、工場員一同齋戒沐浴、極めて新鮮なるものを厳選して克く洗滌して凍結致したものであります。之を特製の防熱装置を施した容器に陳列致しました「ドライ、アイス」を使用し、完全に凍結した姿のまま天覽に供し奉つたのであります。冷凍冷蔵は近年勃興した比較的新しい工業でありまして、今や非常なる勢を以て振興致して居ります。

畏くも大御心を深く斯業にかけさせられ給ふ事は、業者として最も感激恐懼措く能はざるところであります。一同

聖旨を奉體し、今後一層研鑽精勵以て帝國産業發展の爲め微衷を盡し、御鴻恩に應へ奉る覺悟であります。

聖駕を送り奉りて

根室支廳長 福原政二郎 謹話

畏くも 聖上陛下に於かせられては、陸軍特別大演習御統裁に方り地方行幸を仰せ出され、燦たる錦旗は拓け行く十一州の山野に翻翻として翻り、鳳輦を木道の邊阪東端の地我が根室に御迎へ申し、麗しき龍顔を眼のあたり拜し奉るを得ました事は、昭和聖代の御恩恵で定に光榮感激の極で御座います。慶雲天を蔽ひ、瑞氣地に満ち、根千兩國の民草齊しく宏大無邊の御聖徳に浴し、唯、歡喜抃舞措く能はざる次第で御座います。當地方に聖駕を御迎へ申し龍顔を咫尺に拜し奉りました事は全く空前の盛儀でありまして、山川草木は輝く榮光に恵まれ、萬象悉く俄かに活氣を呈してゐます。眞に御仁慈深き大御心の有難さに感激致しますと共に、我々の責務の一層重大なるを痛感してやまない次第で御座います。我々は千載一遇の今日の光榮に浴し奉つたについては、衷心滿腔の赤誠を披瀝して聖駕の御安泰を祈願し奉るは勿論、之れを一契機として根千兩國の民草は各々發奮興起、その職分に渾身の勇を揮ひて精勵し、官民一致協力、地方の發展、皇國の興隆に最善の力を致し、以て無窮の聖恩の萬分の一に酬い奉る覺悟を致さねばならぬと痛感する次第で御座います。

聖駕を送り奉りて

根室町長 松尾 豊次 謹話

瑞雲天に棚引き、光榮の喜び全町に充ち溢るゝ奉迎裡に根室驛に著御あらせられた 聖上陛下には、御長途些の御疲れの御氣色も拜せず、殊の外麗しき 御英姿を眼のあたり拜しました刹那の榮光と感激は何に譬へ申しやうもなく、只々胸躍らせつゝ優渥なる皇恩の辱けなさに感涙を禁じ得なかつた次第でした。

然も不肖豊次辱けなくも公會堂並に御展望所に於いて、御英姿に咫尺し奉りての拙なき御説明を御教聞あらせられ、邊陲ながら國際的な當地方に對し殊の外御感興あらせられたと恐察し奉るだに有難き極みであります、剩へ沿道堵列の民草を愛でさせ給ひ、神社境内に端座奉迎の高齡者を贊はせられ、畏くも特に御會釋を賜つた無邊の御仁慈の忝けなさに、いとゞ感激を深く致しました。又道民奉迎場にて輝く 天顔を仰ぎ、陛下の萬歳を奉唱し得た幾千の人々の歡喜の衷情も偲ばれまして同慶に堪へません。

茲に諸行事滞りなく終へさせられ還御遊ばさるゝを送り奉りて、重大責務の前半を果し得ました無上の喜びを町民一同と頌つ次第ですが、爾後は今日の御聖恩の萬一に報い奉る爲に更に新たなる覺悟を以て、小にしては我が町の發展を期すると共に、大にしては皇謨を翼賛し奉るために、最善の努力と研精を致すこととお誓ひ申したのであります。

昭和十三年三月五日印刷
昭和十三年五月十五日發行

根室町役場

札幌市北三條西一丁目八番地

印刷者 高野 陽太郎

札幌市北三條西一丁目八番地

印刷所 三田印刷所

304
139

終